

Title	W・ トムソンの分配論：資本主義批判史の展開によせて
Sub Title	W. Thompson's theory of distribution on the history of anticapitalistic thoughts
Author	白井, 厚
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1958
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.51, No.2 (1958. 2) ,p.159(63)- 174(78)
JaLC DOI	10.14991/001.19580201-0063
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19580201-0063

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

かった。しかもその後、主観的分析の導入によって資本の生産性を積極的に主張するシーニョアが登場し、主観的な労働・費用概念に基いて三位一体的な理論をより一層明確に体系化していくこととなった。従って、イギリスにおいて労働を経済分析の主要用具とする伝統が、J.S.ミルをへて新古典学派マーシャルにまでもうけつがれていったといわれる場合にも、その内容はかかる過程で、古典学派の労働・生産概念と切斷されたいわゆる生産費概念にほかならなかつたのである。この点からみれば、リカード学派にはじまるながれは、客観的な人間活動たる労働を生産の主体とみなす労働・生産概念の否定という共通の基礎のうえに、資本と労働が協働するという新しい概念を導入・確立し、古典学派の労働概念をいわゆる生産費概念におきかえていった歴史であつたといえよう。

シーニョアがこの共通せる基盤のうえで、新しい分析用具を通じて、三位一体的な労働・生産把握をいかに積極的な形で体系化していったのか、またそのもとで「賃労働」分析がいかに変化していったのか、は次稿で詳しく論及することにした。

(注1) J. Mill, op. cit., p. iii. 訳二頁。
(注2) F. W. Taussig, op. cit., p. 183. しかし前に述べたごとく(五七頁注11)、スミス、リカードの賃銀論と、リカード学派以降の基金説との間の本質的な変化を無視している点では、タウシグに同意できない。

(注3) 「剰余価値学説史」(II)五六五頁。
(注4) 森耕二郎「労賃学説の史的発展」、平実「賃金基金説と労働組合」(「労働問題研究」38号)、堀経夫「リカードの賃労働の批判史」(「リカードの価値論及びその批判史」)等、従来のわが国の基金説研究では、かかる面がほとんど注目されていなかった。

〔附記〕この論文は昭和三二年度慶応義塾学事振興資金による研究の一部である。

W・トムソンの分配論

——資本主義批判史の展開によせて——

白井厚

- 一、リカード派社会主義
- 二、ゴドウィンとトムソン
- 三、全労働収益権と資本
- 四、協同組合主義
- 一、リカード派社会主義

資本主義批判の歴史は、資本の本源的蓄積と共に始まる。既に一五一六年に、トマス・モアは「ユートピア」で私有財産と貨幣のない社会を描き、一六二三年には、カンパネラが理想国「太陽の都」を著した。殊にモアの書は、当時の「羊が人を喰う」社会の批判から出発し、一つの体制としての共産主義を考えた点で、劃期的な意義を持つのである。イギリスのブルジョア革命期には、資本主義的階級分化によって没落しつつあった小生産者を中心としたレヴェラーズ、更に貧農の運動たるデイカーズがそれぞれ資本に奉仕する政治体制に反抗し、とくに後者は、農村共同体にすぎない復古的な

W・トムソンの分配論

立場ながらも、「愛と正義の共同体」実現を期待して、当時の私有財産制度の害悪を鋭く批判した。産業革命、困い込み運動が進展した十八世紀末に至れば、土地所有の農民への影響に対してT. ペイン、J. オウグルヴィ、T. スペンス等の土地制度改革論が現われ、理性の勝利であるかに見えたフランス革命の興奮の波が全ヨーロッパをおおった時、W・ゴドウィンは、権力と財産制度の強いつながりを洞察して、社会問題の解決を私有財産制の撤廃に求めた。更に彼に大きく影響された前期ロマン派の芸術家達もまた、露骨な利害打算によって動く営利秩序に反撥し、古代のロマンズや空想の中に、「透き通るように単純な人間関係」を、吟い、描き、刻むことにより、反抗を表明した。従って初期の資本主義の批判は、E. パーク等の伝統主義者の感情的な嫌悪をも加えれば、資本主義の進展によって経済的基盤をおびやかされた封建勢力、貧農、独立小生産者、熟練職人、並びにその感情を反映した都市のインテリゲンチヤによってなされたといひ得よう。

六三（一五九）

だが十九世紀になると、ここに初めて資本主義の本来の批判者たる労働者階級が歴史の前面に登場する。産業革命によって産業資本が支配的な地位を確立し、機械による労働力の排除が進行するに従って、殊に織物業では、対仏戦によるインフレ、力織機の採用、家内工業の資本への従属によって、労働者の地位は急激に低下した。とりわけ一八一五年の恐慌は、労働運動に一時期を劃するものであり、彼等の機械と大工業に対する敵意を強めた。このような中で、イギリスの労働者階級は著しく成長したのである。

十八世紀末の労働運動の指導者は、広い組織を持ったロンドン通信協会においても、職人、熟練工、商人、技師、芸術家、知識人達であり、政治活動と経済運動を結び付けず、抽象的な政治宣伝に力を入れて、経済状態の改善を一般に軽視していた。組合は、むしろ繁栄していた熟練職人の相互扶助的な同業クラブで、労資が永く対立するという事はなかった。だが、結社禁止法を期として十九世紀に入ると、紡績、織物、炭鉱における大規模なゼネスト、ラダイト運動、Bakewellsの人身保護法停止反対請願、ピータールー事件、カトー街事件等の「戦慄すべき十年間」が到来し、それを結成することは重罪とされていたにもかかわらず、階級戦の学校たる組合によって、労働者の抵抗が強まった。それは勿論、リカードをして労資の対立を正しく認識せしめなかったほどならばではあったが、これらの動きを背景としてその主張が理論化され始めたことは注目すべきである。いくつかの労働者の新聞が発行され、一

八二二年には唯一の社会主義団体であるスペンソ主義博愛協会が生まれ、オーエンは一八一六年に A New View of Society を刊行して労働者の教育ある層に靈感を与えた。そして階級間の利害対立が激化するにつれて、富の分配問題はますます重要視され、分配の法則を中心として、前世紀では孤立していた経済学、社会思想、労働運動が結合を始めた。従来の資本主義批判が、高邁な理性による道徳的啓蒙や、空想の世界に美を追求する前期ロマン派芸術を通じて行われたのに対して、この世紀の運動の主体は労働者階級であり、ユートピアやロマンの夢に代って、打壊し、騒擾、ゼネスト、示威請願運動、そして資本家の富を攻撃する煽動的なパンフレットや綱領が登場したのであった。

リカード派社会主義者と呼ばれる人々の理論は、この経済学、社会思想、労働運動の結合の最初の段階を示すものである。マルクスは一八四七年「哲学の貧困」において、「イギリスにおける経済学の動きに少しでも親しんでいるものなら誰でも、この国の殆んど全ての社会主義者がいろいろな時代にリカード理論の平等主義的適用を提唱してきていることを知らぬものはない。われわれはブルードン君にホプキンスの『経済学』(1822)、W・トムソンの『人類の幸福に最も役立つ富の分配諸原理の研究』(1828)、T・R・エドモンズの『実際の道徳的政治的経済学』(1828)等々を引用し得よう。その他なお四頁ほどの等々をこれに加えることもできよう」と述べた。これがリカード派社会主義者といわれる人々に対する最初の再発見

であると考えられている。その後エンゲルスは、資本論第二巻への序文で、これを「二十年代にリカードの価値論と剰余価値論を、資本制生産に抗するプロレタリアートのために転用し、ブルジョアジイをブルジョアジイ自身の武器で攻撃する全文献」と規定した。もっとも、自らをリカード派社会主義者と呼んだものではなく、チャールズ・ホルの如きはリカードの「原理」より先に著書を出している。この命名には異論もある。トムソン、ホジスキン、グレイ、ブレイ等をリカード経済学によって養われたと見たのは、A・メンガラの『全労働収益権史論』のタナーによる英訳に、H・S・フォクスウェルが書いた序文(一八九九年)であろうといわれているが、続いて、E・ローエンソールが、「The Ricardian Socialists」(1911)を書いて、その名称を一般化した。だが彼女自身「これらの社会主義者達が、特別にリカードの教説によって感銘されたという証拠は何もない。彼等は全て彼等の労働価値説の権威として——リカード自身がなしているように——A・スミスを引用しているのであって、ただホジスキンのみがリカードの著作を良く知っていたようである。けれども、リカードは読まれなかったとはいえず、J・ミルとマカロックは読まれていた。従って師父の学説はその弟子たちを通じて影響を及ぼしたのだといえるかもしれない。しかしながら、これらの社会主義的著作家の論調にも、また彼等の論議の形式にも、特にリカードを想い出させるような何物も存在していない」と語っている。また P. H. Douglas は、(1)スミスは、労働

は価値の原因だと考えたが、リカードは単に尺度だといっている、(2)彼等の中のホジスキンのみが直接にリカードを研究しているだけで、他はJ・ミルやマカロックを通じてリカードを研究しているに過ぎないが、皆スミスの方は読んで、という二つの理由を挙げ、彼等はスミシアンのソーシャリストと呼ばれるべきだと主張した。実際、トムソン等の問題意識も、考え方も、法則の意味も、階級的立場も、むしろスミスに類似性を求めるべきだともいえる。だが何等リカードの弟子ではない彼等を、リカード派と呼び得る理由もあるので、それは彼等が、リカードにおいて完成された古典学派の労働価値説から出発し、リカードの残した利潤の問題を、古典学派の分析用具をもって、その限界の中にとどまりつつも当時の勤労階級の立場から取上げ、リカード経済学解体の一方向をなした、まさにリカード以後の一段階を特徴づけるからである。

注(1) 水田洋「社会主義思想の成立」岩波現代思想W・二二頁。
 (2) 二〇年代の織物工の賃金は、一八〇〇年の半から半に低下した。当時の社会主義運動の統計的基礎としては、Patrick Colquhoun; Treatise on the Wealth, Power, and Resources of the British Empire, 1814. が屢々引用された。これは年収一四万六千ポンドの王族から、四五ポンドの農、鉱業労働者に至る各層の所得分布を掲げて、社会を生産的階級と不生産的階級に分ける考えを促進したといわれる。Ch.

- Introduction by H. S. Foxwell, *The Right to the Whole Produce of Labour*. tran. by M. E. Tanner. 1899, p. xlii. C. R. Fay; *Life and Labour in the Nineteenth Century*, 1920, p. 74. H. L. Beales; *The Early English Socialists*, 1933, p. 75. A. F. Young & E. T. Ashton; *British Social Work in the Nineteenth Century*, 1956, p. 8.
- (c) H. N. Brailsford; *Shelley, Godwin, and their Circle*, p. 33-48.
- (4) H. Collins; *The London Corresponding Society, in Democracy and the Labour Movement, Essays in honour of Donat Torr*, 1954, p. 134.
- (5) G. D. H. Cole; *A Short History of the British Working-Class Movement 1789-1947*, 1925, Vol. I, p. 55. 林、河上、嘉治訳六〇頁。
- (6) 岸本誠二郎「英国経済学史における一八一七年前後」〔古典学派の生成と展開〕I所収)二三〇頁。
- (7) A. S. Hutt; *British Trade Unionism—A Short History*, 1952, Chap. 1.
- (8) Hodgskin; *Popular Political Economy*, 1827. の誤。
- (9) 一八二四年の誤り。一八九二年独訳第二版において訂正。
- (10) K. Marx; *Misère de la Philosophie*, 1847. 山村訳六

っていたのは専ら支配階級であったから、経済学は市民社会を確立する意味においてのみ革新的であり、市民社会の批判は経済学の外で行われねばならなかった。従って、蓄積財産制度の弊害を指摘し、この制度の消滅すべきことを期待する彼の「政治的正義についての研究」には、富の不等等による悲惨な状態についての感覚的な描写は豊富だが、価値や資本の経済学上の分析は存在しない。ただそこには、富の基礎を労働に求める考え方、分業によっては下層階級は利益を受けなかったこと、労働時間は延長されたが賃金は増さなかったこと等の指摘があるのみである。それでは財貨はどのように分配、所有されるべきか？ここに彼独自の財産論が展開されるのであって、彼は財産を三つの等級 *degrees* に分けた。即ち(1)他人が用いるより、自己による使用が大きな快楽を生ずるようなものに対する権利。(2)自己の勤勉の産物に対して持つ権利。(3)他人の勤勉の産物に対する特権である。そして、(1)は永久的な権利、(2)は消極的な、補助的な意味しか持たず、見方によれば一種の収奪のようなもの、(3)は(2)とも直接に矛盾する強奪の権利であり、大衆に無知と貧困を強制するものと説明している。従って彼の体系の中では、第一の必要、高度の理性による快楽に基づく所有ということが強調されておき、現実の、かかる精神に貫かれていない財産の分配は、啓蒙の不足による悪徳の結果であるというように把握される。彼によれば、人々が正義を自覚するようになれば、他人を不幸にすることによって利益を得ることはなくなり、商人の親方は、雇っている労働者

W・トムソンの分配論

- 四頁。ただし訳文は必ずしも邦訳によらない。以下の引用でも同様である。
- (11) 隅谷三喜男「リカード派社会主義序説」〔古典学派の生成と展開〕I所収)二四九頁。
- (12) Vorwort, *Das Kapital*, Volksausgabe besorgt vom M.-E.-L. Institut, Bd. II, 1932, SS. 13-4. 長谷部訳日評版第二巻三四頁。たゞしエンゲルスの規定は正確ではな。
- (13) 高橋誠一郎「アダム・スミスと社会主義者」三田学会雑誌 四四巻一五五頁。
- (14) E. Lowenthal; *The Ricardian Socialists*, 1911, p. 103.
- (15) P. H. Douglas; *Smith's Theory of Value and Distribution*, in *Adam Smith, 1776-1926*, 1928, p. 98.
- (16) 堀経夫氏はこの理由を、(a)全労働収益権の根底となった労働価値説の代表者はリカードであった、(b)分配論に重点を置いた最初の人はリカードであった、の二点としている。堀経夫「リカード派社会主義」昭和三年、四頁。「イギリス社会思想史概説」昭和三年、六一頁。
- (17) 隅谷三喜男、前掲論文、二六八頁。

二、ゴドウィンとトムソン

ゴドウィンの段階においては、社会の経済的基礎を客観的に把握して、その法則性を追及し、それを総体として説明し得る条件を持つ労働者に対して、もっと十分な報酬を与えようとし、労働者も奴隷状態を脱して、資本家の存在を無用なものにする。こうして平等な社会に達すれば、知識は進み、利己心は消滅し、人々は財産の蓄積を侮蔑の感をもって眺め、贅沢はなくなり、分業は存在するが売買も交換ももはやなくなるのである。従って、彼は封建社会と市民社会を区別し、後者をより、悪いものだと考えたが、商人と資本家、職人と労働者、単純商品生産と資本主義生産の区別は明瞭でなかった。彼のユートピアは、簡単な生活様式を讚美し、独立と自由と安全の確保、個人の有用性と必要に基づく財産の分配等々、没落しつつあった独立小生産者層の願望の反映であった。彼の体系は、市民社会における知識の飛躍的な発展、封建的な身分制度の廃止に大きな期待と夢を寄せながらも、その基礎にある商品交換を、資本流通もろ共に排除しようとしたものである。

初期のトムソンに最も大きな影響を与えたものはJ・ペンサムであった。J・ボーリングのペンサム全集には、二人の間の手紙が載せてあるし、トムソンは一八二二年十月から翌年二月まで彼の家に招かれて生活を共にした。このことは、限られた人しか近づけなかったペンサムの性格からして、非常な名誉であったという。その滞在の間に、彼はその主著『人間の幸福に最も役立つ富の分配諸原理の研究』の執筆を開始した。その冒頭の頁には、「功利、即ち最大可能な人間の幸福の追求は、この研究において常に存在する指導原理」であって、「エルヴェッス、ブリーストリー、ペリーイその他の人

々によって承認されたこの原理は、ベンサムが『Introduction to the Principles of Morals and Legislation』及び有名な『Traité de Legislation』の最初の教章において発達せられ、永遠に確立されて、倫理学上のあらゆる他の誤れる標準を排除するに至った」と記されている。彼の著作の中にベンサムの説を読み取ることは極めて容易であつて、M・ヘアによれば、彼は不幸にもベンサムの文体をも取り入れた。ヘアはまた、トムスンが平等思想に接近したことをもつて、ベンサムから離れてオーエンの軌道に合流するものだといっているが、むしろトムスンの考えでは、平等に近づくことによつて一層よくベンサム流の功利が実現されるのである。

ベンサムと並んで、トムスンに影響を与えた思想家としてゴドウィンを無視することはできない。フォクスウェルが「トムスンの著書は冒頭より結尾に至るまで、ゴドウィンの精神をもつて浸透されている」といっているのはやや誇張だとしても、常にゴドウィンが念頭にあつたことは事実である。彼は『分配諸原理の研究』の最初に、政治経済学及びそれに関する分野の研究者を、「知的的 (Intellectual) と機械的 (mechanical) の二つに分け、それぞれの代表者としてゴドウィンとマルサスを挙げた。彼の解釈によれば、前者は人間の精神的要因を重視して物理的法則を軽視し、後者はその逆で、最大の生産、最大の消費だけを問題としていた。そこでトムスンは、この中間を取つて、「我々の目的は、社会科学に政治経済学

確実な知識を適用することである。」⁽¹⁰⁾ という。彼の場合社会科学とは道徳学のことであるから、つまり倫理的な要素を盛り込んだ経済法則、すなわち「正しい分配」の法則を発見することがその目的であつた。これは勿論、客観的法則の叙述たる科学としては後退であるが、これまでの経済学と、それが描いていた資本主義的合則性を克服しようという問題意識をもつて、社会体制を批判し、新しい秩序の要求を行うという点で、経済学をプロレタリアの武器に転ずる最初の試みとしての意義を持つのである。従つて、トムスンの体系は、経済学を古典学派に学ぶ一方、現実の社会批判において、理想社会の記述において、多くのものをゴドウィンに負っている。

トムスンは、この法則を「分配の自然法則」 Natural laws of distribution と呼び、「分配諸原理の研究」の前半において、つぎのように説明する。労働は富の父である。富は労働によつてのみ作られ、労働はまたその唯一の尺度である (Sect. 1)。富の分配の目的は、それを造つた人に最大可能な幸福量を保証することである (Sect. 2)。全ての成人は、特別な例を除けば男女とも富から同じような幸福を得る (Sect. 3)。そこで、多数者の幸福は少数者の幸福よりも望ましい (Sect. 4)。富は労働によつて造られるのだからその労働を富の生産に最も有効ならしめるに十分な刺戟を与えられねばならない (Sect. 5)。最大の生産のために必要な最大の刺戟は、労働の自由な方向と、生産物を完全に使用する保証とである (Sect. 6)。また、これらの生産物を自発的に交換することは、幸福を増大する

(Sect. 7)。逆に、これらの生産物を権力で取り上げるとは、幸福を減少させる (Sect. 8)。一人から最少のものを取り上げることでも、それを得た人の分よりも大きな幸福を減少させる (Sect. 9)。それ故、生産者が満足だと考える対価物がなければ、労働生産物のいかなる部分も彼から取り去られるべきではない (Sect. 10)。富は、最大の生産と両立する最大の平等を生ずるように分配されるべきである (Sect. 11)。この正しい分配のためには、人為的な制限や奨励が必要でない (Sect. 12)。自由な労働、交換から生ずる不平等は、それが安全にとつて必要な限り有用である。何故なら、安全がなければ生産がなく、生産がなければ富もまた存在しないであろうから (Sect. 13)。安全にとつて必要でない不平等は、平等の利益を損うから有害である (Sect. 14)。従つて、以上の結論として、分配の自然法則は「自由な労働、生産物の完全使用、自発的交換 Free labor, entire use of its products, and voluntary exchanges」である。即ち

- I. 全ての労働は、その方向と継続について自由で自発的でないべからぬ。
- II. 全ての労働生産物は、その生産者に保証されねばならぬ。
- III. これらの生産物の全ての交換は、自由で自発的でないべからぬ。

以上の論旨によつて明らかのように、この分配の自然法則とは、リカードにおけるような資本主義社会の客観的な分配法則とは全く

W・トムスンの分配論

異なつて、いずれも「ねばならぬ」という道徳的な規範である。だが彼の方法自体は、社会制度の可変性を主張しながらも、リカードの抽象的な非歴史的な論理に近く、ローゼンベルグは「彼はブルジョア諸関係と闘いながら、この諸関係の擁護者と同じ方法論的立場に立っている」と述べている。この方法論とは、彼がベンサムから受けついで功利主義であつた。これは、歴史的な人間存在を、単に快樂と苦痛を感じる生理現象の主体としか考えず、資本主義的な営利秩序を最良の秩序として合理化し、讚美するというブルジョア的な社会観であつたから、このような快樂心理学、道徳算術から出発するトムスンの考えは、平等主義的に適用するとはいへ、また同様に形而上学であり、営利行為を人間の永久の自然本能として絶対視する個人主義であり、その分配の自然法則においては、資本主義の一般的基礎たる商品生産を、窮極のものと考え、自由な労働、生産物の保証、自由な交換という三原則は、まさに小商品生産者の理想であり、或いはまた、マルクスが自由・平等・所有・ベンサムと形容した商品流通の一つの抽象であろう。労働の自由と自発性、制限や奨励の排除等の主張は、ゴドウィンを思ひしめるものがあるが、ゴドウィンは強く利己心を排除して、社会全体の利益のみを考慮の対象としたのに対し、トムスンの考え方はより利己的で、その故にいわゆる全労働収益権や、対価物を求めた交換を、その法則の中に組み入れている。これは、ゴドウィンの説が極めて理性的な段階の体系であるのに対し、トムスンの考えは、市民社会が成熟して、発

展した商品交換と、それに伴う地上的な人間感情をそのまま肯定し、これを更に権利として主張することを示すものである。ゴッティンとトムソンを比較すると、前者は利己心の放棄を要求し、蓄積、売買、交換を排して、商品交換そのものを否定する態度をとったが、後者は商品生産を絶対視し、ただその当然の結果たる資本主義生産を非難する、或いは商品生産が行われて、しかも資本主義には至らない社会を作り上げようとするものであった。

注(1) 拙稿「十八世紀英仏社会思想の発展とウイリアム・ゴッティン」三田学会雑誌五十卷八号参照。

(2) W. Godwin; Enquiry concerning Political Justice, and its Influence on Morals and Happiness. 3rd. ed. 1798. edited by F. E. L. Priestley, Vol. II, pp. 432-7.

(3) Ibid., pp. 551-2.

(4) 一八一九年四月七日付、トムソンがゴッティンに学校を建てようとして、ゴッティンが意見を述べた。また一八一九年九月二十九日付、ゴッティンは自宅に逗留することをトムソンに勧め、その家庭の習慣を報告した。The Works of Jeremy Bentham, Vol. X. pp.506-7.

(5) P. K. Pankhurst; William Thompson (1775-1833), Britain's Pioneer Socialist, Feminist, and Co-operator, 1954, p. 15.

(21) Principles, p. 178.

(22) Л. Розенберг; Исгория политической экономии, 1934-6. 広島訳(三七一頁)。

(14) 彼の個人主義については Marie Hasbach; William Thompson, 1922. Beiträge zur Geschichte der Nationalökonomie, herausgegeben von K. Diehl, S. 128. 及び Adolf Held; Zwei Bücher zur Sozialen Geschichte Englands, S. 380. 参照。

(15) ゴッティンの理想社会が、ルソーの流れを汲んで、簡素な、孤独な色彩が強いのに対して、トムソンは産業主義的である。パンカーストによれば、彼は英国におけるサン・シモンの崇拜者であった。R. K. P. Pankhurst; The Saint-Simons, Mill and Carlyle, pp. 111-2.

(16) 後の協同主義に至っても、彼はヘンサム流の功利主義、個人主義から解放されない。「交換がなければ産業も富の継続生産もあり得ない。交換のない労働は、労働のない交換と同様に無益である。」Principles, p. 45. 協同社会では善行の交換が行われると説明される。

三、全労働収益権と資本

従ってトムソンは、資本自体に対抗する主張を行い、方法論において古典学派の限界内に留ったとしても、それとは階級的立場を異

W・トムソンの分配論

(9) W. Thompson; An Inquiry into the Principles of the Distribution of Wealth, most conducive to Human Happiness; applied to the newly proposed system of voluntary equality of wealth, 1824, p. 1. 以下 Principles. と表記する。

(7) M. Beer, A History of British Socialism, 1923, Vol. 1, p. 220. 加田訳二六一頁。

(8) H. S. Foxwell; Introduction, The Right to the Whole Produce of Labour, p. xxxix.

(9) Principles, p. iii.

(10) Ibid., p. x.

(11) 「これほどの富の生産と分配の方法を説明することによって、研究者達はその仕事が終わったと考えた。……我々の目的は、最大の再生産と幸福を導くような富の分配様式を定めることである。」Principles, p. 582. 「政治経済学、即ち単に個人競争による富の生産の科学は、新しい社会科学、即ち人間幸福増進の科学を道と譲らねばならぬ。」W. Thompson; Appeal of One Half the Human Race, Women, against the Pre-tensions of the other Half, Men, to restrain them in political, and thence in civil and domestic, slavery; in reply to a paragraph of Mr. Mill's celebrated "Article on Government", 1825, p. xiv.

たすることを示した。即ち、労働価値説により、生産力発展の最大の刺激として経済的基礎づけられた、全労働収益権説である。

この言葉は、A・メンガーの同名の著書によって普及した。メンガーは社会主義の終局的な目標を「経済的基本権 die ökonomische Grundrechte」によって簡単に表現することができ、それは(1)全労働収益権 das Recht auf den vollen Arbeitsertrag (2)必要に応じて所有する生存権 das Recht auf Existenz (3)その特殊形態たる労働権 das Recht auf Arbeit の三つであるとしている。(1)そして「マルクスとロードベルトスとは、彼の社会主義理論の最も重要なものを、その見解の出所を示すことなしに、前代のイギリスおよびフランスの理論家より借りて来た。……人々が随喜して科学的社会主義の創造者であると主張するマルクスとロードベルトスは、その深さにおいてもその学識においても、遙かに彼等の先駆者に劣っている。(2)」「社会主義思想の領域は、それが全労働収益権を中心とする限り、W・トムソンの著作において完全な発達を遂げたようである。その後の社会主義者、すなわちサン・シモン主義者、ブルードン殊にマルクスとロードベルトスは、トムソンの著書から、直接間接に彼等の見解を得ている」と主張する。これに對してエンゲルスは、多種多様な社会主義の主張を、いくつかの権利の主張の中に押し込めることは叙述をねじまげる結果となること、自分の労働生産物に対する労働者の権利という考えは、生産手段と生産物をプロレタリアート全体のものとして要求とは全く別

のものであること、マルクスは全労働利益権の主張を行ってはいないことについて指摘し、マルクスの剰余価値論発見の意義を、酸素発見の歴史になぞらえて説明している。全労働利益権説は、古典学派の限界を踏み破ることはあっても、マルクス自身によって批判され、マルクスが築き上げた経済学とは全く異なることが注意されるべきであろう。

周知のごとく、リカード経済学は、労働価値説によって資本と労働との実質上の不等価交換を説明し得ず、崩壊してしまつた。リカード以後の経済学は、資本家の利潤取得をめぐって、さまざまな説を主張した。J・ミルは資本も労働するといひ、マカロックは自然も労働すると述べ、更にシーニオアは、利潤の基礎を節慾に求めて資本の立場を擁護した。そこで労働階級の立場に近い労働価値説の主張者達は、この価値法則が貫徹されないのは、資本の横暴によるのであり、そこから生産者達の窮乏が生れるのだと考えて、労働者がその全生産物を取得するべきだと唱へたのである。この考え方は、この時代には意義を持ち、「危険な学説」であつたが、資本主義的な搾取の合理性を否定して、これを道徳的に非難し、平等な立場に立つ生産者がその生産物を全部自分のものにしよつたというのだから、資本家と労働者を共に独立小生産者に還元する、小生産者的なものといふことができよう。それは、資本の要求に対立する意味では労働者の立場に立つが、労働者階級の歴史上の役割を理解し得ず、かえつて保守的な側面を持つのである。ホジスキンはトムソン

もグレイも、すべて産業革命の完成によってその経済的地位を失つた小生産者、或いは熟練職人層をその基礎とし、彼等が同情した労働者階級の窮乏は、実は自らの没落の一つの反映であり、彼等が問題とした労働者の重要な部分は、実は次第に資本に従属しつた小生産者、熟練職人であつた。エンゲルスは「社会主義者は見通しがきき、貧困に対する実際の方策を提案しているが、元来彼等はブルジョアジーから脱落したものであつて、絶対に労働者階級とは融合し得ないものである。」といつているが、彼等の理論が労働者階級から忘れ去られ、彼等に運動の理論を与え得なかつたことも、革命的な手段を嫌悪したことも、かかる性格から理解されるべきであろう。

そこで、トムソンにとっては利潤の本質等が経済学的に把握されていぬから、現実の社会の矛盾は、分配の自然法則という規範からの逸脱として考えられている。彼が利潤の取得に向けた攻撃はまことに激しいものがあり、「利潤という名で生産的労働者から強奪する報償」"pinder; extort"などと表現している。そして現実の不平等は、ゴドウィンと同じように、強力によって維持されていると考えるから、強力による富の不平等の道徳的害悪として、快樂量の減少、悪徳の発生等を数え挙げ(Principles, Chap. 2, Sect. 2)、また経済的害悪として、不生産的労働者による収入の浪費、幸福に役立つこと最も少なき技術や交易を行わせること等を述べている(Works, 2)。そして、この不平等な状態において労働の生産物を

生産者の同意なしに取り上げる手段を、平等な権利に干渉し、独占権を保護する法律、労働の自由を制限する法律、労働者の平和的団結を妨げたり、資本家の結合を目的としたりして、労働者の賃金を、分配の自然法則の標準から変えようとする法律 (Chap. V, Sect. 2)、世襲権力 (Sect. 3)、課税その他の政治権力 (Sect. 4) に求めている点は、彼が資本主義を商品生産の必然的な帰結として考えず、単純な商品生産は自由で平等で自然なもの、資本制生産となると不自然、不平等なもの、と考えたことを表わすものである。

従つて、彼は資本の歴史的な性格を理解しない。彼は「蓄積された富は、量の面から見れば、……社会の生産諸力に比較するといふに足らぬものであり、また単に数年間におけるその社会の事実上の消費に比較してさへ云うに足らぬものであるから……現に眼前にある如き蓄積された富にのみ注意が向けらるべきではない。」と述べて、資本の重要性を主張する経済学者達を批判する。彼によれば、年々消費、消滅する富は、僅かの間しか印象を残し得ないが、消耗の遅い家具、機械、建物等の富は長く眼前に留るから注視されるのだと考える。そしてこの、労働に還元すれば非常に僅かな富は、少数の者によって所有され、多くの人々の労働を、常に少数者の利益、享樂のために向ける。そこで彼の説に従えば、資本、つまり固定的な富は、僅かな労働の結果であるから、それに対して多くの生産的な労働を重要視しなければならない。このような考え方は、資本を単純に蓄積された富と等置し、労働はそれに対して補助的な役

働を果すに過ぎないと考える当時の資本家達の物神崇拜に対して、ホジスキンの説と共に有効な批判であり、マルクスは「資本論」第二巻二篇一七章でこの部分を長く引用している。しかしながら、彼もまた「生きた労働と対称化された労働の關係について優れた考えを示しながら、資本の弁護論を心理現象をもって説明し、資本は単に僅かな労働の産物ではなくて資本化された剰余価値であること、単に過去の労働の産物であるばかりではなく、現在もまた造られつたあることを理解せず、労働の意義を重視するのあまり、むしろ資本の役割を幾分過少評価してしまつた。これはまた、資本の有機的構成の低い時代、生きた労働の個別的な意義が重要であつた時代の、ロマンチックな反映であるといえよう。

かくて彼は、利潤取得による富の不平等、資本の物神性に対して批判を加えたが、事実上資本を生産手段や生活資料と同一視して、資本の歴史性、本質を理解せず、小生産者の立場からしては新しい経済学をつくることができず、古典学派の限界の中に留つた。そして彼は「勤勉な人々の労働の成果が、不思議にも取り去られる」といふ「有害な分配」から脱れる道を、(1)簡単な代議制、(2)特権等の漸次的廃止、(3)道徳的知識の進歩と普及、という穏健な手段と、労働者が資本を持つという折衷策に期待したのである。

注(一) A. Menger: Das Recht auf den vollen Arbeits-
ertrag, 1891, S. 6. 森戸訳 一一頁。

- (2) Ibid., SS. IV-I, 頁二〇—二二頁。
- (3) Ibid., S. 51. 頁八九頁。
- (4) F. Engels; Juristen Sozialismus, *Die Neue Zeit*, 5 Jahrgang. 大月版 M・E・選集第一七卷下所載。
- (5) F. Engels; Vorwort, *Das Kapital*, Bd. II.
- (6) 生産物に対する生産者の権利という考えは、ロックの自然財産権理論を受けつぐものであり、古典派経済学は、労働価値論という形態でこれをその経済理論の中軸とした (Cf. R. Schlatter; *Private Property*, 1951, p. 181) から、直接に利潤を脅かさないようなかたぎでは、全労働収益権に似た考えは屢々古典学派の中でも述べられている。例えば J・S・ミル——「財産制度の根本は、生産者が自分の生産した物について権利を有するところである。」J. S. Mill; *Principles of Political Economy*, edited by W. J. Ashley, 1906, p. 218. 頁田訳・2・三三頁。
- (7) K. Marx; Randglossen zum Programm der deutschen Arbeiterpartei. 西訳「レーナ綱領批判」一九一三〇頁参照。
- (8) メンガー説の批判は数多い。E. Lowenthal; *The Ricardian Socialists*, 1911, p. 45. K. Diehl, *Über Sozialismus Kommunismus und Anarchismus*. 5 Auflage, 1923, S. 251. 小泉信三「経済学説と社会思想」二三頁等。

- (14) F. Engels; *Die Lage der Arbeitendenklasse in England*, 1845. 大月版 M・E・選集、補巻2、三五六頁。
- (15) A・メンガーはトムソンの体系の中に剰余価値 surplus value という言葉を見出したが、それは勿論マルクスの概念とは異なって、稀少性による高い価格 (Principles, p. 14) や、資本の使用による特別の利得 (Ibid., p. 167) である。
- (16) Principles, p. 598.
- (17) Ibid., p. XV.
- (18) Ibid., Chap. V. Sect. 5.

四、協同組合主義

W・スタークによって自由主義と社会主義の crossroad と呼ばれる時代⁽¹⁾にあって、トムソンは自由と平等が矛盾する社会の現実の姿を見て、これを両立させることに苦心した。各人の能力には差があるのだから「労働によって生産された品物の分配における絶対的な平等は、……個人的競争の制度の下においては、実行が不可能である⁽²⁾。もし強制という外部的な力を用いれば、平等も可能だが、強制は自由と両立せず、安全を脅かす。安全がなければ労働への刺激がなく、生産力は減少し、幸福は損われるのだから、当然強制は排除されねばならぬ。そこで、自由と平等を或る程度両立させようとして、考えられたものが、分配の自然法則の第三番目、自発的な交換によって余分な富を平均化し、双方の満足を増そうということ

W・トムソンの分配論

- (9) トムソンは価値の実体をも労働に求めたが、同時にそれを富の尺度とも考え、しかも慾望の変化まで考えて混乱した。彼は節約された労働も価値を作るといふ。
- (10) 労働価値説と倫理的、政治的要求との関係については R. L. Meek; *Studies in the Labour Theory of Value*, 1956, pp. 125-9. 水田・宮本訳一五二—一八頁参照。
- (11) マルクス、前掲書、二九頁。
- (12) トムソンの場合——「極端な富と貧困という現在の社会状態を、numerous class of small possessors の存在よりも望ましいと考えるような人が一体何人いるのか?」Principles, p. xii. この法則が行われれば「大多数の生産的労働者は、資本家、つまり勿論彼が完全に所有している小さな土地を耕作するために必要な資本(改良手段、食糧、道具、種)の所有者になるであろう。そして製造業者の大部分もまた、各人が仕事を出来るだけの小さな自分の資本を所有するので、労働者と同時に資本家となるであろう。」Principles, p. 245.
- (13) 河上肇は「社会問題研究」二二号において、この権利の思想は社会主義に特有のものではなくて、例えば J・ミルによつて、一転して私有財産の弁護のために用いられていること、この思想は、極めて幼稚な経済状態の下に発生した、個人主義の臭味の抜けない旧式の権利思想で、今日の実際に当てはめてみれば殆んど無意味なることを指摘している。

あった。こうして得た調和を、彼は平等な安全 equal security と呼んでいる。

- さて、この状態に近づく、富が増大し、知識と道徳が進歩するという二つの長所があるが、同時に彼は、このような自由競争社会の害悪 (レセ・フェールへの批判) を次のように教えている。
- I. それは必然的に仁愛主義に反し、日常生活全般において、利己主義を行為の主な動機とする。
- II. それは、人類の一半たる女子の富の生産力を、個別的家族制度の浪費その他の害悪によって麻痺させる。そして全ての人の平等な享樂と最大幸福にとって必要な、両性間の権利と義務の平等化を、不可能ではないまでも、困難ならしめる。
- III. それは、個人の判断の範囲を限定するので、往々不利益な無分別な行為に導く。
- W. それは、人生にありがちな病氣、老齡、不具その他の出来事に對して、適当で十分な手段を与えない。
- V. それは、個人財産の支配により圧倒的となる、家庭の拘束という偏見と専制によって、有益な自然科学及び道徳教育の進歩を妨げる。そしてまた、科学や技術の進歩を個人の利益に役立たせようとして、これを隠す必要から、一般の知識の進歩を妨げる⁽³⁾。
- そこで彼は「人あって大胆にも、いかにして分配の平等を完全な安全に一致させるか?」という大問題を、合理主義に基いて解決しようとして、これを促進した。この人こそスコットランド、ニュ

- 「個人的安全の制度は再生産を保証するために平等に対する制限を必要とするのに反し、社会的安全の制度は、平等な分配を完全に享受するために何ら制限を必要としない」との理由で、協同主義を選び、そこでは、生産物に対する権利は保証されるが、幸福の増大のために、生産に先立って、人々は自発的に報酬の平等に同意するだろうと期待する。協同主義の特徴はつぎのごとくである。
- (a) 三百人から千人またはそれ以上の人々が、科学技術の力をかりた共同労働によって、享楽手段の最大量を生産するために、自発的に結合する。こうして需要と供給は常に均衡する。
 - (b) この社会は、健全で愉快な生活を保持するに必要な土地——例えば一人一エーカーから一エーカー半——を耕作し、余分な労働力はこれを最も有用な衣服、住居、家具の製造に向け、最後に贅沢品等に向ける。
 - (c) 各人四〇ポンド、一家族はその四倍の資力を持つところでは、住宅建設、農業その他必要な資材、機械購入のために出資する。更に富んでいるところでは、一人更に約四〇ポンドの出資によって、住宅、農工業の用地を購入する。
 - (d) それほど富んでいない時は、土地、住宅、資材等を借りる。

- (e) 各人は共同の蓄えから衣食を給与され、幼少年は性別年齢別に共同宿舎に起居し、大人は一〜二室を持つ。
- (f) 労働をより、生産的に健康に愉快にするために、農業と工業に交互に従事する。
- (g) 生産物を増加するために、婦人は育児と調理から解放される。
- (h) 全ての児童は最良の教育を受ける。費用は成員の労働による。
- (i) 思想、住所、その他の完全な自由がその社会の規則である。
- (j) その社会の政治は、その全ての成人に個々のものである。
- (k) あらゆる科学、芸術は、全体の利益のために研究される。
- (l) 成員の間の不和は、内部の調停手段で解決される。
- (m) 成員は自由にその協同体を離れることができる。⁽⁶⁾

更にホジスキンの「Labour Defended」(1885) を書いて、自然法に基いた小生産者の自由競争の社会を理想化すると、トムソンは「Labour Rewarded」(1887) を出して、そのような社会では平等は実現されず、平等と安全を二つながら確保する道は、協同主義の社会以外にはないと主張し、また「Practical Directions for the speedy and economical Establishment」(1880) を書いて、更に協同主義の細目を示した。かかる推移は、独立小生産者の自由競争から社会主義への移行と簡単に考えられやすい。だがトムソンの協同主義形成のプランにおいては、労働組合による賃金引上げはあまり期待されず、むしろ組合は労働者の知性を高め、資金を貯え、それを基にして自分達の商品製作場を作るといので

あり、こうして徐々にでき上った協同社会の生産は、全世界に外国市場を見出すというのではなく、最も必要な物品を相互的に充足する程度のものだということからもわかるように、プロレタリアートによる生産手段の社会化とは意味を異にして、自由な小生産者の、自己の生産物の安全を得んがための、自発的な結合である点が注意されるべきであろう。

リカード以後の思想と運動は、「リベンサム主義の濃霧」に包まれつつも、基本的にはリカード↓リカード学派という「弁論論的経済学」と、リカード↓リカード派社会主義という「小ブルジョアの要求と批判」、並びにチャーチズムに至る「プロレタリア的批判と闘争」の三つの流れを形成した。それは相互に影響し合ったが、それぞれ内容を異にしていたのであって、トムソンが安全という時、ベンサムと違って直接生産者の生産物に対する安全の意であり、平等は、市民的自由というブルジョアの権利概念を越え得ず、商品交換を規制するのと同じ原則が支配する小所有者の平等を意味したのである。従って、彼の書は「勤労階級のバイブル」とみなされ、協同主義の出版物や労働者の集会で常に引用、討議され、その指導者達に大きな影響を与えたが、またその考えはいくつかの点でオーエンより進んでいたが、結局は中間的であって、下層階級の役割を理解し得なかった。三〇年前後に熱狂的に彼を支持したのは、資本を持つ小生産者や労働者の上層であって、彼の説は労働者階級からもやがて忘れられたのである。

だが、当時の段階、労働者階級自身のイデオロギーが、未だ明確なかつたで理論化され得なかつた段階においては、このような限界が、むしろその故に資本主義批判史の上に重大な役割を果したことを忘れるべきではない。プロレタリアは独自の理論を作るまでは、彼等はその闘いの武器をかつての革新的なブルジョアの手から奪ねばならなかつた。功利主義も労働価値説も全労働収益権も、いずれもそのような論理であつた。そしてこれをもって資本主義を攻撃し、経済学者の虚飾偽善を論難し、その体制批判をプロレタリアートに伝える任務こそ、彼等小生産者のものであつた。そのような意味で、トムソンの分配論も、古典学派の成果を社会思想に結び付け、限られた層ではあるが労働運動に影響した最初の例として、十九世紀思想史の上で重要な意義を持つのである。

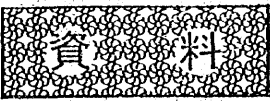
(1) W. Stak: The Ideal Foundations of Economic Thought, Three essays on the philosophy of economic thought, 1948, p. 51. スタークは、ホジスキンの説をリアリズムイックで自由主義、トムソンをアイディアリズムイックで平等主義と考え、マルクスの理論は、ホジスキンの発展論とトムソンの集産的ヒートピアの綜合だとしている(p. 148)が、これはかなり独断的な見解といふべきであろう。

(2) Principles, p. 95.
(3) Ibid., pp. 368-9.

- (4) Ibid., p. 384.
- (5) Ibid., p. 385.
- (6) Ibid., pp. 387-391.
- (7) この区別はかなり明瞭である。ヘンサムとJ・ミルに従う哲学的急進派でも、実業家に劣らず熱心に古典学派の永遠の諸法則をもって社会主義と争ったし、社会主義はまた、容易には労働者階級と融合することができなかった。
- (8) スチーヴンによる比較は、いさな単純であった。(Cf. L. Stephen: *The English Utilitarians*, vol. II, p. 261.) トムソンは、政治経済学者の主張する安全は、他人の不安全、掠奪を含む偽りの安全であり(Principles, pp. 585-6) 権力と欺瞞と偶然の結果を永久化し、生産力を犠牲にする(Ibid., p. 589) と批判している。ヘンサムにとっては財産所有者の安全が問題であったが、トムソンは労働者の安全に関心をよせたので、平等と安全を均衡させるのにヘンサムほど困難を感じなかった(R. K. P. Pankhurst, *ibid.*, p. 35).
- (9) G. D. H. Cole; Robert Owen, 1925, p. 194.
- (10) トムソンは、一八一八年頃にはオーエン主義をただ進歩した救貧策に過ぎず、全社会に適用するのは誤りだと考えていたが、二二年頃を転期としてそれへ向った。彼は London Co-operative Society の有力な一員となり、Co-operative Magazine に屢々寄稿した。(Cf. Morton & Tate; *The British*

Labour Movement, 1770-1920, A History, 1926, pp. 54-7
 G. D. H. Cole; *Socialist Thought, The Forerunners, 1789-1850*, 1953, pp. 114-7. W. P. Ryan; *The Irish Labour Movement, 1919*, pp. 32-45.)
 トムソンは「敵の主将ともいえるヘンサムは、ヨーク出身のW・トムソンという極めて尊敬すべき人物で、私とはよく知り合った」と語っている。(Autobiography, 1783, pp. 124-5. 西本訳一五三頁。ミルのトムソン論に J. S. Mill; Further Reply to the Debate on Population. *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd. 62 1929, SS. 225-239. 参照)だが、博愛心に燃える資本家オーエンに対し、トムソンは生産者の立場にあった。彼は早くから労働組合の合法化を支持し、上流階級の慈善心に訴えたオーエンを批判して、彼等は生産者の敵であると主張している。また、政治運動を避けたオーエンよりも、彼の方が徹底した民主主義者だということもできよう。この「協同主義の二大指導者の間には若干の対立があった。(Cf. R. K. P. Pankhurst; *ibid.*, pp. 171-9.)

〔附記〕この論文は、本塾三二年度前期学事振興資金を受けてできたものである。なおこの内容の一部は、経済学史学会十六回大会において発表された。



マーケティング・リサーチの現状

佐藤 保

近年アメリカを中心としてマーケティング・リサーチ(或いはマーケット・リサーチ)に関する議論が盛んになってきた。それと共に関連する多くの書が発行され、我が国においてもその翻訳、並びに関係書の出版が行われている。それ等を通じてマーケティング・リサーチの現状と方向を探ってみよう。

W・フォックスは次の如く定義している。^(註1)「マーケット・リサーチとは、内部的、外部的な基礎資料ないし派生的な資料から取り出したデータ——これらのデータは量的であることもあるし、また質的、つまり叙述的であることもある——を集積し、排列し、分類し、分析しまた解釈し組織するところの技術のことである。そしてまた、それによって販売高を上昇せしめたり、あるいは販売、配分の費用を減少せしめたり、さらにこれらの両者によって純収益を増加させたりするものことである。」この述べ方はやや抽象的で意味をとりにくいが、松下電工の三好俊夫氏は、「マーケティングとは、一般

に『製品とサービスを生産者から最終消費者に引渡すまでのあらゆる商業活動を総称する言葉だ。』といわれています。そしてマーケティング・リサーチとは、『マーケティングのすべての分野の問題に関係する事実の体系的な、客観的な、徹底的な、調査と研究だ。』といわれています。マーケティング・リサーチには、マーケット・アナリシスあるいはセールス・リサーチ(社内販売記録の分析)、およびコンシューマー・リサーチ(消費者の態度、反応、選好を発見し分析する調査をいいます)とかアドバタイジング・リサーチ(広告効果を分析すること)とかが含まれています。……現代の経営ではどの配給ルートを通じて、どの価格で、どんな商品を、どの市場に、どんな宣伝やセールス・プロモーションをもって販売するかという広い複雑な問題について、経営者は常に決定を下さねばなりません。この決定を下すために、たんに経営者の主観によるよりは、より客観的な基準あるいは尺度といったものが要求されることとなります。そこでこのいろいろなマーケティング方法の能率を測定するものとしてマーケティング・リサーチが登場してきます